

図書館だより



No. 3

平成 25 年 6 月 28 日発行

今年は統計史上三番目の早さで梅雨入りした関東甲信越地方。梅雨入りしたものの雨がなかなか降らず、どうしたものか一時は心配されましたが、中盤からは梅雨本番の日々が続いていますね。今は梅雨明けのカラッとした青空が待ち遠しいばかりです。

さて、この夏は恐竜の誕生から絶滅までをストーリーとともに見せていくこのエンターテインメントショー『ウォーキング・ウィズ・ダイナソー』が日本に上陸します。このショーでは、最先端の技術を用いて、手足や目の動き、瞬きに至るまで再現されたこの実物大の恐竜たちが、目の前をノシノシと闊歩し、時にはエサをめぐる戦う姿を見る事ができるのだそうです。7月12日(金)の横浜公演からスタートし、埼玉でも8月1日(木)～7日(水)にさいたまスーパーアリーナで公演が行われます。この夏は、子どもも大人も恐竜に夢中になるかも！？



爽やかな気分＊

913.6-ハ『空色ヒッチハイカー』 橋本 紡 著 新潮社

ずっと背中を追いかけてきたお兄ちゃんがいなくなり、僕は目指すものを見失った。そんな僕は受験勉強そっちのけで、お兄ちゃんの残した1959年製のキャデラックに乗り、神奈川から九州へ向けて900キロの旅へ出た。助手席には僕の車にヒッチハイクしてきた杏子ちゃん。口は悪いけど、どこか憎めない可愛い女の子。気づけばひとり旅は、ふたり旅となり、ふたりに乗せたキャデラックは様々な人に出会い、たくさんのアクシデントに見舞われながらも、どうにか九州にたどり着く。

暑い夏、くだらないことに人生をかけて、がむしゃらになって駆け抜けた旅が、お兄ちゃんの背中ばかりを追いかけていた僕を変えていく。

もしも恐竜を飼うならば＊

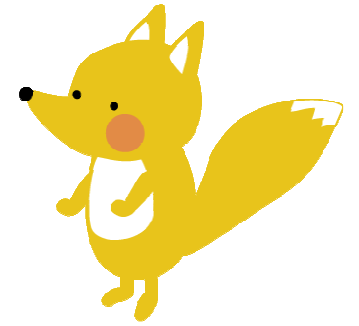
457-マ『恐竜の飼いかた教えます』 ロバート・マッシュ 著 平凡社

恐竜にまったく興味がない人にも読んでみてほしいこの本。現代社会で恐竜を飼うとしたら、どの恐竜がおすすめかを、住まいや家庭環境に合わせ、1匹ずつ丁寧に紹介してくれています。解説文は「迷子になりやすく、物覚えがきわめて悪く飼い主すら忘れてしまうことがある」、「足をつねに暖かくしておかないと、すぐに風邪をひく」などユーモアたっぷり、紹介されている恐竜たちに、だんだんと親しみが湧いてきます。そんなことはありえないのに、「もしや本当に恐竜が今もどこかにいて、それを飼うことができるのかも」と思ってしまう。楽しく読みながら、恐竜の名前や生態にも詳しくなれます。

新美南吉 生誕100年

先月号では、今年生誕150年となる画家ムンクを取り上げましたが、日本にも今年生誕100年を迎える著名人がいます。その人は、児童文学作家の新美南吉さんです。「新美南吉」の名前でピンと来ない人も『ごんぎつね』や『手袋を買いに』の作者と言えば、「ああ！あの物語を書いた人か」と、きっとみなさんわかることでしょう。

愛知県半田市に生まれた新美南吉は、中学時代から創作活動を始め、29歳という若さでこの世を去るまでの間に今もなお読み継がれる名作童話をいくつも生み出しました。代表作のひとつでもある『ごんぎつね』は、彼が18歳の時に世に出した作品です。若くして才能に恵まれた新美南吉の作品に生誕100年の今年改めて触れてみましょう。



何度も読み返したくなる暖かな物語

E-ク『手ぶくろを買いに』 新美南吉 著 黒井健 絵 偕成社

きつねの親子の山にも寒い冬がやってきた。きつねの坊やは、初めての雪に大はしゃぎ。だけど、駆け回った坊やの手は冷たい雪で真っ赤になる。母さんキツネは、坊やの片手を人間の手に変え、手ぶくろを買いに人間の街へ行かせる。初めて降り立つ人間の街。きつねの坊やは無事、手ぶくろを買うことができるのだろうか。

子どもの頃にこの絵本に出会っている人もたくさんいるかと思いますが、再び読んでみると、懐かしさが胸に広がります。優しく温かな物語に、黒井健さん描くキツネの親子の絵がぴったりと合っていて、大人になってからも読みたいと思える癒しの絵本です。

図書館の貸出が簡単になりました

既にご存知の人も多いかと思いますが、みなさんの生徒証が新しくなったことで、図書館での本の貸出も以前よりスムーズに行えるようになりました。

使い方は、とても簡単。本を借りる時に、生徒証を持ってきて、カウンターにある専用の読み取り機にピッとかがざしてください。これで、みなさんの名前が検索され貸出画面に出てくるようになっています。使ってみた人はみんな「おお！」とちょっと楽しそう。私たち司書も貸出手続きがスムーズになって、とてもありがたいです。

まだ、使ってみたことのない人は、新着本もたくさん入ってきているので、使い心地を試しに本を借りにきてください。



世界を旅する12ヶ月 ～アメリカ～



「世界を旅する12ヶ月」第3回目はアメリカ 合衆国です。

アメリカ合衆国は本土の48州と、飛び州のアラスカとハワイの2州、連邦直属の首都ワシントンD.C.から構成され、その面積は世界第3位となります。

その広い国土には、ワシントンやニューヨーク、ロサンゼルスなどの大都市が多くある一方でグランドキャニオンやイエローストーンなど雄大な自然もまた多く存在します。さらにディズニーランド

やユニバーサルスタジオなど世界的に有名なテーマパークも充実していて、旅行で訪れる時には何を目的にどこを回って楽もうかと非常に悩んでしまいます。

アメリカが生んだ感動の物語

933-キ 『アルジャーノンに花束を』 ダニエル・キイス 著 早川書房

チャーリー・ゴードンはパン屋で働く32歳。けれど、彼の知能は幼児レベル。そのチャーリーに舞い込んできたある手術の話。手術を受けたねずみのアルジャーノンの賢さを見て、「もっと賢くなれたら」と願っていたチャーリーは手術を受けることを決意する。手術は成功し、チャーリーは天才と呼ばれるほどの知能を得た。賢くなったチャーリーの生活は一変するが、それは決して幸福と言い切れるものではなかった。チャーリーは賢くなればなるほど、孤独を感じるようになる。周囲に抱くのは不信感ばかりで、率直さや親切さといった温かい感情を失くしていく。

昔の自分も今の自分もどちらも同じチャーリーであることを受け止めてほしい。そんなチャーリーの心の葛藤を読んでいると、幸福の在り方について考えさせられます。

アメリカのノーベル文学賞受賞作家が描いた名作

933-ヘ 『老人と海』 ヘミングウェイ 著 新潮社

海で漁をして暮らす老人サンチャゴ。しかし、彼の漁はもう84日も釣れない日が続いていた。相方として舟に乗っていた少年と離れ、今日こそはと、ひとり海に出た85日目、とうとう大きな獲物を罾にかける。そして、何日にも渡る死闘の結果、彼は巨大な魚を仕留めた。仕留めた魚を横づけにして、船は港へと引き返すが、その魚を狙って次々に鯨がサンチャゴの舟に襲いかかる。必死に魚を守るが、鯨は容赦なく魚を食いちぎっていく。どんどん身の欠けていく魚の姿を前に「この魚との闘いは無駄なものだったのだろうか」と後悔がふと頭をよぎりながらも、鯨と闘い、港へと辿り着く。

他に誰もいない孤独な海での命をかけた闘いは、静かながらも読む人をドキドキさせる迫りに溢れています。また、孤独な海の闘いとは対称的なのが相方である少年とのやりとりです。かつて同じ舟で漁をし、心を通わせてきたふたりの強い絆には何度も心を打たれます。

みんな大好きアメリカ生まれのコーヒー店

673-ア 『スターバックスの感動サービスの秘密』 荒田 雅之 著 パル出版

おしゃれな雰囲気の中で、おいしいコーヒーが飲めるスターバックスは日本でも大人気のコーヒー店です。そのスターバックスで働く人たちがどのような理念を持ち、接客サービスを行っているか、そして、どのような接客サービスがあることで私たちはスターバックスに惹かれているのかが書かれています。また、終わりには、スターバックスについてもっと詳しくなれるトリビアもたくさん紹介されていて、スターバックスファンにとってはたまらない1冊になっているのではないのでしょうか。

読んでいて、「そうそう、こういうサービスがあるからスターバックスが好き」と頷くことがたくさんあり、スターバックスで働きたい！と憧れを持っている人には自分が働く立場になった時、どんなことを心掛けていけばいいのかを考える参考書としても活用できると思います。

語学研修でもお世話になるアメリカのリゾート地

297-ナ 『Hawaii de 花散歩』 Hiroshi Makaula Nakae 著 書肆侃侃房

青い海、暖かな気候、マリンレジャー、ショッピング、様々な魅力に溢れ、世界中から観光客が訪れるハワイ。そんなハワイには、まだまだたくさんの魅力があります。その一つが島々を彩る様々な花です。南国に咲く色鮮やかな花々は、住人だけでなく、旅人の心と体を癒してくれます。そんなハワイの花を集め、1冊にしたのがこの本。それぞれの花にまつわるコラムも載っていて、花だけでなく、ハワイの歴史や街の雰囲気など、ハワイに詳しくなるのにも適した本です。

日本では馴染みのない花も多いですが、カラーの写真豊富に使って紹介してくれていますし、「ウキウキ」、「ミッキー・マウス・ツリー」、「スクランブル・エッグス」など、読んでいて楽しくなってしまう名前のお花もたくさん！どんな花なんだろうと気になった人は、本の中から探してみてください。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

4月から読んでいる『深夜特急』はいよいよクライマックスの6巻目に突入しました。ロンドンには無事辿り着くのでしょうか。

今月は**真保裕一**さんの著書『**デパートへ行こう!**』(913.6-シ 講談社)を読みました。

老舗デパート鈴膳百貨店は創業百年を迎えながらも、経営危機に直面し、店内は盛り上がり欠けていた。1日の営業を終了し、閉店後の店内には当然、誰もいないはず…。けれど、その夜、デパートには何人もの侵入者が潜んでいた。人生に行き詰ったおじさん、家出したカップル、捨てられた腹いせに宝石を狙う女性社員、追っつてから逃れてきた男、社長などなど。「どうしてこんなに人がいるのだ!？」とそれぞれが首をかしげながら、様々な思惑を抱え、デパートの中を駆け回る。一体、鈴膳百貨店はどうなってしまうのだろうか。賑やかで、必死で、涙ありの大騒動、みなさんも読んでみてください。

